

## 日英語の分詞による時の指示について

河本 誠

岡山理科大学総合情報学部社会情報学科

(2011年9月30日受付、2011年11月7日受理)

### 概要

日本語の「た」で終わる過去形には英語の過去形から見ると極めて特異的な用法が存在する。共時的な観点から「た」は用法が分類されてきていて、日英語の過去形の違いについてもすでに明確になっているが、その違いがなぜ存在するのか、という点に関しては筆者の知る限り、説明がなされていない。ここでは、「た」が元々、英語の過去分詞に相当する連体形から生じたものであることを、筆者は、最近、知るに至った。本小論では、このことを仮定すると、「た」の特異的な用法がどれほど合理的に説明できるかを見ることにある。この考察の結果、「た」は過去分詞から生じ、現在英語のような過去形の用法を持つに至っているが、いまだに過去分詞の性格を強く保持しており、この過去分詞の性格が「た」の特異的な用法に強く出ていると見られることを明らかにすることができた。特に、過去分詞というものが、日英語共に、絶対過去を表わすものではなく、相対的な時を示すものであるということが、特異的な「た」の用法において決定的な役割を果たしていることが見えてきた。

### 〔1〕日英語での時制の相違

#### (A) 副詞節の時制

次の例文（英文と日本文）を見てみよう。（英文の例文については、以後、断りが無い限り、リーダーズ英和辞典とジーニアス英和大辞典からの引用による）

- (1) a. I got up before the sun rose.  
b. 日の出ないうちに起きた。  
c. 日が昇る前に私は起きた。（筆者訳）
- (2) a. I shall start after he comes (has come). 《完了時制は時間的前後関係を強調》  
b. 彼が来てから 出発する 予定です。  
c. 私は彼が来た後で出発します。（筆者訳）
- (3) a. I killed time in a coffee shop while I was waiting.  
b. 待っているあいだ喫茶店で時間をつぶした。

筆者はこれまであまり意識したことはなかったが、時制の現れ方に関し、このようにはっきりとした違いがあることに今回気付くことになった。すなわち、これらの英文では現在を基点とした過去、未来（現在）の出来事に対し、主節と従属節とで同じ時制が使われているが、それに対し日本語訳の従属節の時制が英文の場合と食い違っている。当然、接続詞 before, after, while の意味の違いから日英語で時制の違いが生じているはずである。(1)、(3)のように英文の従属節の動詞が過去形であるにもかかわらず、(1)c や(3)b のように日本語訳では現在形が使用可能である。(2)では、英文が現在形であるが、日本語訳では少なくとも過去形が使用可能である。

この違いをどう見るか。まず上の日本語訳の時制を元の英文のように変えた次の日本文の妥当性を見てみよう。

- (4) c. \*日が昇った前に私は起きた。
- (5) c. \*私は彼が来る後で出発します。
- (6) b. 待っていたあいだ喫茶店で時間をつぶした。

これらの例から言えることは、主節と従属節が時の差を示す接続詞(before, after など)で結ばれている場合には、英文ではそれぞれの節が同じ時制であっても、日本語訳では時制を変える必要があるということ。他方、

時の差を伴わない接続詞 (while など) の場合には、日本語訳は従属節の動詞として現在形と過去形のどちらでも可能である。この違いは次のようにまとめられよう。

(英文) A before B (Aが主節で文脈に沿う) ・ ・ ・ ・ (日本語) Bの前にA (Bは現在形)

(英文) C after D (Cが主節で文脈に沿う) ・ ・ ・ ・ (日本語) Dの後でC (Dは過去形)

A、Cが主節であることから文全体を中心になっており、そこが文脈の流れに沿った時制になっているが、その点で日英語は共通である。英文では、主節、従属節は発話時現在から見たところの時制になっているが、日本語従属節B、Dでは、文脈の流れに沿う時制の主節が現れる前に、仮の現在から見たところの時制になっていると言える。他方、whileの英文の例では、主節、従属節共に同じ過去の事態を表しているが、日本語訳としては上のように従属節の動詞に2つの時制(3)b、(6)bを対応させることができるので、従属節内への視点の置き方に2つの手法が許されると言える。この場合、whileは同時性を示す接続詞であり、beforeやafterと異なり、主節と従属節に時の差がないことがそのことの原因であることが理解される。

以上から、英語は主節と同様、従属節においても、発話時点に基点を置き、その基点から事態を述べる傾向が強く、日本語は、文脈の流れに沿っている(後続する)主節の内容が不明のまま、従属節を仮の現時点から述べる傾向が強い、ということが言えよう。したがって、日本語では、前置された従属節のところの解釈は、後続する主節の理解が完了するまで時に関し完結しない(pending)状態になることが分かる。このことに関して、最近参加した言語学会で「時制が示す時に関し相対的である」、という表現を使っていたの思い出すが、この用語を借りれば、日本語は従属節のところの解釈が主節に対し相対的にしか決定できない形になっていると言える。これに反し、英語は絶対的な時の指定になっていると言える。そのため英文では主節と従属節を前後でそのまま入れ替えても時に関して全く問題ないが、それはこのことも大きく関係していると言えるのではないか。

こう考えると、英語に比べ日本語のほうが時の(前後)関係を示すことではある意味で優れていると言えるかも知れない。それは時の前後関係が時制の違いにより強く反映されるからである。英語でも(2)aのように完了形を使えば時の差を明示することができる場合があるが、(従属節は含んでいない)次の文と同様、明示しない(あいまいな表現になっている)場合が多いという印象を筆者は持っている。

(7) a. I remember seeing her.

b. 私は彼女に会ったことを覚えている(筆者訳)

英語については、このような時制の使い方、すなわち、時に関する視点移動がなく、言わば客観的な表現になるというのは利点であるとも考えられる。以上の日英語の違いは、1つには主節と従属節との位置関係から来るとも考えられるかもしれない。それは日本語が一貫して①従属節、②主節の順であるのに対し、英語ではその順の他に①主節、②従属節の順も文の構成上全く問題ないからである。この日英語での節(句)の順の違いが、先に見た日英語の動詞の時制の違いを生じさせているというのは少し言い過ぎだろうが、そのことと極めてうまく整合しているとは言える。日本語では、従属節の後ろに接続詞が来ることや、主節が後ろに来ることが保障されている。(1)や(3)の日本語訳での従属節の現在形は相対的現在を表しているに過ぎず、後続する主節が判明した段階で従属節の絶対時が決定されることになり、先に述べたように時の関係が時制に反映されやすいという利点がある。とは言え、節の順序や接続詞の位置だけでこのような動詞の時制の違いを完全に説明できるとは思わない。必ずしもそれらに必然性は認めがたい。次の例はそのことを示しているが、日英語での違いは明確になった。

(8) 私は起きた、日の出る前に。(作例)

#### (B) 時に関する視点の置き方(日英語での比較)

日英語で上の(1)、(2)の時制の違いは何を意味しているのだろうか。直前の(A)で述べたように、時に関して視点の置き方が異なっていることが分かる。そのことから、英語の時にに関する視点移動が言わば「ズームアップなし」の移動であるのに対し、日本語では従属節でズームアップし、そこを抜け主節に移動するとズームを文脈レベルに戻す操作が行われると言える。ズームアップするときは、時に関する文脈の流れから切り離し、その節を仮の一時的な現在から見た時制にする。そう考えると、逆に、英語でいわゆる時制の一致というのは、時に関してズームをアップしなくて済む手法であるともいえる。英語において人の言ったことを伝える際の間接話法も同じ手法と見ることができ、英語の直接話法も日本語の上のような時の処理に近いものと考えられる。



日本語の従属節においては、このように後続する主節との時の相対的關係に基づいて時制が選択される傾向にあることを見た。後続する主節の表わす事態に時の基点を置く、すなわち、文脈に視点を置くことにより、初めてそこから従属節の時が確定する。したがって、日本語においては、前置された従属節の動詞が過去形の場合、主節が文脈上から過去を表わすとき、その時点から見てのさらに過去（大過去）を表わす場合もあるという紛らわしさも生じる可能性がある。

(2) d. 2日前同じものを食べていたので、昨日はさすがに食べる気がしなかった。(作例)

逆に、全体が未来の事態に関しても、未来のある時点に主節の時がすえられることになる場合、たとえばそれより前を表わすときには過去形が前置された従属節に現れる場合がある。

(2) c. 私は彼が来た後で出発します。

日本語で、主節に先行する従属節を理解しようとしているときには、仮の現在を基準にして、その基準点が後続する主節の時制によって後で確定されるという順序になる。結論としては、時に関し、日本語では従属節に仮の現在時の視点を据え時に関するズームアップの手法が使われるのに対し、英語ではズームアップを使わない傾向があるということになる。つまり、そういった意味で日本語の「た」は発話時点から見た絶対過去ということを必ずしも表わすわけではないと言える。そのことの中に、様々な特異的な「た」の用法に対し、納得のいく説明を与えることができる要素が含まれている、ということを見るのが2章である。このことを詳しく見る前に、副詞節以外の節にも触れておこう。

### (C) 他の節

副詞節以外でも、副詞節のときと同様に、英語は時に関するズームアップを使わない傾向が強く、日本語はズームアップ手法が使われることが原則的であると言えそうである。それをここで見る。

#### <名詞節の時制>

次に名詞節を見てみよう。

(9) a. I said that I would do my best.

b. ベストを尽くすつもりだと私は言った。

(10) a. I found that he was a kind man.

b. (話してみると) 彼は親切な人だとわかった。

(11) a. The radio report predicted that snow was coming.

b. 雪になると予報した。

c. 雪になることをラジオは報道している。(筆者訳)

副詞節の場合と同様、名詞節においてもこのように日英語で時制に違いが生じる場合がある。日本語訳で従属節の動詞に現在形が使われる理由は、副詞節のときと同様、仮の現在を設定しこの従属節の事態を（これらの例では、当面、未来の事態として）pending の状態で示し、後続する主節によってその絶対時が確定される、とすることができる。これに対し英文では、前置された主節が絶対時で先に示され、それに呼応した形の絶対時で従属節が述べられる。これらがいわゆる時制の一致と言われている現象である。いずれの例でも、英語では主節と従属節が発話時点から見て同じ絶対過去である。このように、英語では仮の現在を設定しないことが日本語訳との時制の違いとして生じていることが分かる。

#### <形容詞節の時制>

次に形容詞節はどうであろうか。

(12) a. We used to work with a guy who would later be a president. (作例)

b. 私たちは後に大統領となる人と一緒に働いていた。 (筆者訳1)

c. 私たちは後に大統領になった人と一緒に働いていた。 (筆者訳2)

d. We used to work with a guy who is now a president. (作例)

この日本語訳の中での形容詞的従属節では、時制を一致させて共に文脈上の流れに沿った過去形を使うやり方と、従属節で時のズームアップにより現在時制で述べるやり方が可能であることが分かる。形容詞節による修飾を伴った名詞全体が、現時点も存在するような場合、英語では現在時制と過去時制の両方が可能であるが、現在形がより好まれることは明白である。しかし、存在しない場合には、現在時制は使用できない、言い換えれば現時点から見た現在形を使った節により名詞を修飾することはできない。(12)b,c で分かるように、その点で日本語も全く同じ原理が働いていると見ることもできるが、副詞節のときと同様の視点の移動

が使われているとも考えられ、曖昧さを含むことになる。それは、もはや従属節の内容が現時点で違っている、次の例(13)aのように現在形を使うことも可能だからである。

(13) a. 私はそこで一生の妻になる人と出会った。 (すべて過去の意味で) (作例)

b. " (まだ私の妻である)

c. 私はそこで一生の妻になった人と出会った。 (すべて過去の意味で) (作例)

したがって、名詞を修飾する形容詞節の場合、対象が存在する絶対時に基づいて表示する際の現在形、過去形の選択と、日本語においては時のズームアップに関連した時制としての現在形、過去形の選択がさらに加わっていることが理解できる。つまり、日本語では、視点の置き方の違いにより形容詞節の中の時制が選ばれる可能性があり、どのように現れるかは文脈の流れやその他の要因など文体が関係していると言うしかないだろう。

## 〔2〕日英語の過去形と過去分詞形（現在形と過去分詞形の関係）

ここでは、1章でみた相対的な「た」の本質を探ることにする。

### （A）「た」の起源－日本語の連体修飾－

動詞はその意味の中に時を示す要素を持っている場合があり、その時がどのように文の中に反映されるかを確認することはここでの考察にとって重要と思われる。「た」については、元々連体形の「てある」を経て形成されたと考えられていて、元来、その連体節（句）の表わす事態が既定（完了）や過去であることを示すものであった。例えば、「(台風で倒れた)木」なる名詞句においては、「台風で倒れた」が連体節でその出来事がいつであったのかは絶対時としてはこれだけでは決定できない。しかし、

(15) (台風で倒れた)木が道をふさいでいた。(作例)

の中で考えると、文全体（すなわち主節）の絶対時が文脈や状況などから決定され、それを基準時として「台風で倒れた」という出来事は、その（直）前のある絶対時ということになる。（台風で倒れた）という部分は、「ふさいでいた」の時より前ということを示すだけで、それ以上のことは何も言っていない（直前ということもありうるが、それは内容から推測される程度の事柄である）。つまり、「台風で倒れた」の部分は、主節の動詞が示す絶対時である基準時に対し、本質的にそれ以前ということを示すに過ぎない、つまり、「た」は相対的過去を示している。しかるに、

(16) (先日、台風12号で倒れた)木が、今日、やっと取り除かれた。(作例)

ここでは、「先日、台風12号で倒れた」という出来事が過去の特定の出来事であり、この「た」は絶対過去時を示す形で使用されていると考えられる。このように「た」が絶対過去を示す場合もあるが、かつて動詞の終止形が他にあり、それと共存していたことも考え合わせると、「た」の元々からの本質的意味は相対的過去を示すことであると言える。そうすると「た」の絶対過去の用法は、他の語との関係などから成立する派生的用法と見なければならぬだろう。

日本語を歴史的にさかのぼって見ると、（まだ十分明白にはなっていないようであるが）この点に関し筆者は現在次のように理解している：「る」「た」が元々動詞の連体形で、ある基準時に対し相対的にそれぞれ現在（あるいは未来、時不定、完了）、過去（ある時より以前、即ち既定）を表わすものであり、それが今日、終止形としても使われるようになっていく。このことを前提として以後の話を進めるが、正にこの成り立ちが英語から見れば不思議と思える様々な“過去形”語尾「た」の用法を生じさせていることを本小論で主張しようとするものである。

上で「た」の連体修飾の例を挙げたが、その際、「た」は既定（完了）の意味を必ず持ち合わせていて、実はこれは英語の過去分詞に相当するものであることを筆者は最近理解したところである。このことが、多様な「た」の用法を説明できるのではないかと考え、今回の考察に至ったわけである。そのため、まず英語の分詞に関する先行研究を見ておくことにする。

### Participle（分詞）

名称は「動詞で形容詞のはたらきにあずかる（participate）もの」の意から、それで動詞形容詞（verb-adjective）と呼ばれることもある。---（筆者による省略）---

名称は共に内容上ふさわしいものでなく、現在分詞は必ずしも現在を意味せず、過去分詞も過去を意味するとは限らない。現在分詞は動作・行為の継続・反復を意味するので、継続分詞（durative participle）、反復分詞（iterative participle）、未完了分詞（imperfect participle）などと呼ばれ、過去分詞は完結・状態を意



味するので完結分詞(*perfective participle*)、完了分詞(*PERFECT PARTICIPLE*)、結果分詞(*EFFECTIVE PARTICIPLE*)などと呼ばれる: *screaming children / a trained teacher.*」(p.833:英語学時典)(下線は筆者による)

筆者は、この考察がかなり進んだ段階に至ってこの記述に改めて目を通したが、その際この説明とは逆の思いを抱かざるを得なかった。現在分詞や過去分詞を文中の他の語(主に文中の他の動詞)との関係から見ると、それらは基準時に対し相対的な意味でそれぞれ現在(未来)、過去を示していることに気づくからである。筆者はこれまで分詞の意味を積極的にそのように見ることに考えが及ばなかったが、分詞の理解が深まった現段階で改めて考えてみると、現在分詞、過去分詞の名称はその本質を示すものとして極めてふさわしいものであると評価したい。この引用の分詞の説明の中に相対的な時の概念が含まれていないことがむしろ大きな問題であると考えられるものである。

連体修飾には様々なものがある。時を表わす副詞を含んだ節であれば、先の例(16)のようにその中に現れる「た」は絶対過去時を表わすように機能する場合があると考えられるが、よく取り上げられている「(曲がりくねった)道」の「曲がりくねった」は過去のある時点の出来事を表しているとは考えられない。その事態は存在しない。先の例(16)での絶対過去時を表わす連体用法の「た」が今日の日本語の過去を表わす終止用法の「た」に来ていると見られるが、「た」は本質的には相対的に既定性、完了性を示すものであり、逆にそのことが多様な「た」の用法を生んでいると見られることを後でさらに確認することになる。

このような観点から、前章の日英語の相違を再検討することにする。まず、英文で主節、従属節の時制がそれぞれ出来事の絶対時を示しているのに対し、日本語訳の従属節では、英文と異なり、相対的な時制が使用されていることが分かる。その場合の接続詞は時間的な意味を内包し、それに呼応する形で相対時制が使用されていると理解される。時間的な変化が重要でない場合には1章で見たように、日本語でも英語と同じ時制を用いることもできる。次もそのことを示す例である。

(17) a. He was drowned because he fell off the pier.

b. 彼は落ちたので溺れて死んだ。

厳密に言えば主節と従属節のそれぞれが表わす出来事に時間的な差があるが、それが because の関係で述べられる際は重要視されず、時制を変える必要もないということである。

## (B) 英語の分詞の用法

日本語の「た」が元々動詞の形容詞的用法の連体形語尾であり、既定(完了)の意味を表し、その連体形動詞は英語の過去分詞に相当する用法を持っていると考えられる。英語においてこのことはすでに指摘されていることであろうが、確認するため、英語で時の関係を示す形容詞的用法をまとめようとする、1つには次のようになる。

- ① 過去分詞(ed) : 既定または完了した事態を示す
- ② 現在分詞(ing) : 進行中の事態であることを示す
- ③ 未来分詞相当(do, to do) : これからの事態であることを示す

英語では、このような分詞形や不定詞形が他の(助)動詞の定形と結びついて、次のように絶対時を表わす動詞群を形成している。

- ① (be to 不定詞)
- ② 完了形(複合時制)
- ③ 受動態(複合時制)
- ④ 進行形(複合時制)

英語において、分詞を含んだ塊(句)が絶対時とどのように係わっているかを見ようとする、筆者には分詞構文というものがすぐに浮かんでくる。

(18) Walking along the street, I met an old friend of mine.

〔時〕

(19) Desiring rest, I lay down in the shade.

〔原因・理由〕

(20) Turning to the right, you will find the place you were looking for.

〔条件〕

(21) Admitting what you say, I still think that you are in the wrong.

〔譲歩〕

(22) Walking on tiptoe, I approached the little window.

〔付帯状況〕(p.833:英語学時典)

(下線は筆者による)

これらの例で、現在分詞から始まる副詞的な働きをする句は、現在分詞から始まっているため定形 (finite) 性を与える部分がなく、時に関して相対的にしか働かない、ということが分かる。文の残りが表わす絶対時に応じてその部分の時が解釈されるということで、1章で示した日本語訳の従属節の中の動詞と全く同じ機能を果たしていることが分かる。つまり日本語でも英語でも、分詞を持った時に関する節や句は、時の指示に関し絶対時を示すのではなく、文の中の他の要素に依存している、要するに時に関し相対的であるということである。これは筆者にとっては、実際そのように処理していたのであるが、大きな発見、認識である。したがって、1章で示した英語と異なるような日本語訳の時制は、動詞が絶対時を表わす過去形ではなく、過去分詞そのもの、ないし過去分詞性の強い用法であると見るべきことを示している。因みに、「る」とか「た」が成立していなかった頃の日本語で、このような場合、どのような表現手段が取られていたかは筆者の今の知識の限界を超えているが、極めて興味深いものである。以上から、日本語の「た」が元々既定（完了）ということだけを意味する連体修飾の過去分詞であり、後に現在の絶対時を示す終止用法を獲得しているけれども、現在も両方の性質を保持し続けているという結論に達する。「た」の元々の連体修飾の用法というのは、英語の過去分詞の用法（の一部）であり、「た」が獲得した新しい用法というのは英語の直説法過去の用法である。こういう見方でいえば、上に挙げた英語分詞構文は、現在分詞から始まる塊が、現在分詞である ing 形により、同時性という時の関係で文の残りに結び付けられているということになる。（参考：河本）

英語において、句が不定詞や動名詞を中心に構成されている場合も、分詞と同様、副詞的用法の場合、その句は絶対時ではなく相対時を表していることが改めて認識される。不定詞はさらに形容詞的用法（日本語の連体修飾の用法）も持っており、この場合も時に関し過去分詞と同じようなことが言えそうであるが、日本語の過去分詞との違いがあるのか、ということについては筆者のこれからの課題としたい。

### （C）分詞単独での用法

不定詞や分詞の持っている時の意味は、あまり明確に述べられているのを見たことはないが、次のようにまとめることができよう。いずれも相対的であることが1つの重要なポイントである。

- ① things to be done      (下線部は相対的未来を示す)
- ② things done            (下線部は相対的過去を示す)
- ③ things being done    (下線部は相対的現在を示す)

日本語の「た」が示す特異的な用法はこれまでかなり研究されてきていると思われるが、「た」が過去分詞であることを基にした「た」の分析を少なくとも筆者は知らない。ここではこの観点から文終止に現れる「た」を眺め、また、それに対応する英語の形態も合わせて考察することにする。

#### <英語の裸過去分詞>

先に、日本語の「た」は副詞などと共起することで絶対時を表わす用法を持っており、英語の分詞は他の（助）動詞と結びついて絶対時を表わす複合時制を発達させていることに触れた。「た」を理解するために、過去分詞がもとになっている他の言語現象はないであろうか。そう考えると、英語でも

- (23) Well done!
- (24) How come?    (ここでの come は過去分詞ではないだろうか)
- (25) Got it!

など、話者の認知的な行為が深く係わる表現に過去分詞が単独で現れることに気付かされる。この場合、過去分詞の表わす相対時が、発話状況から現時点に設定され、動詞の（したがって文の）主張性が生み出されると見ることができる。これらの例は、すべて話者による間近の事態の認知・評価を示すものである。1章で見た英語と時制が異なる場合の日本語の「た」の用法において、過去分詞であることから来る既定性が出現しているとすれば、同じように英語でも過去分詞であればその既定性が利用されていてもおかしくない。実際、これらの例が示すように、そのようになっていることから、日英語共に共通の原理が働いていると言えよう。

これらは、また、次の複合動詞の省略形と見ることもできる。

- ① Be + 過去分詞
- ② Have + 過去分詞

どちらの複合時制も内部での語どうしの結合力は強く、be や have のところが定形を示し、動詞としての、したがって文としての主張性が出るが、定形を示す部分がない先の例(23)、(24)、(25)の場合には、その発話



状況が主張性を補っていると考えられる。現時点だけが特別な扱いを受けることは当然であり、その1つとして、現時点を示すことに関しては省略を許容するというのは無理のないことで、これらの例がそのことを示していると思われる。

日本語の「た」の分詞単独での出現については後で項目を設けて考察するが、英語での分詞単独の出現について、少なくとも、話者による発話時点の認知・認識を示すものであると言ってもよいことが分かった。これが日本語のムードの「た」の用法とほぼ同じではないかと予測するものである。日英語共通に存在するこのような過去分詞の用法は、話者による発話時点の認知・認識を表明するものであり、この点から今後さらにムードの用法全体を分類していく必要があると考えられる。

#### <「のである」> - 「る」、「た」の不安定さ -

一方、日本語のほうも、「た」が元々連体形であったため、「た」で終わる文の主張性を高めるため、「た」の後に語を付加しようとする力が働くのではないかと考えられる。その典型例の1つが次のものではなからうか。

(26) 「伊達が勝ったって」

「へーえ、伊達が勝ったんだ」

(27) 「伊達が勝った」という新聞記事を読みながら」

「へーえ、伊達が勝ったんだ」(p.88: 野田)

その他、「た」の後に様々なものを後続させ多様なニュアンスを付加すると同時に文の主張性を高めていると考えられるが、その中で「のだ」(=「んだ」=「のである」)は比較的軽いニュアンスを持ったものであることに間違いない。

「のだ」部分は定形(finite)を表わしていると考えられるが、その前に来るものが過去分詞の連体形で、その後「のだ」で全体が話者の認識であることを現時点で表明するような構造になっていると考えられる。したがって客観的表現を最後に主観的主張に変化させていると見ることができる。「ある」自体も、よく考えてみれば連体形であるのだが、動詞に続くことから「のだ」が全体として終止の語尾のように意識され、かつ定形の性質を示すに至っていると考えられる。動詞に後続する語尾的なものであるとみなされ、そのような機能を持つようになったと考えれば納得できる。また、

(28) 「伊達はその次の試合でも勝った」 (作例)

(29) 「伊達はその次の試合でも勝ったのだった」 (作例)

この例のように、「たのだった」(=「たのであった」)が単なる過去の意味で使われることも指摘されている。これをここでの分析から見るとどうであろうか。やはり「のだった」の前の「た」が終止として不安定であり、それを解消するように「のだった」を後続させて主張性を高めていると考えられる。「の」がその前に位置する節を名詞化するものであることから、名詞化の特徴も兼ね備えていると考えられる。名詞化が持つ働きについては多くの研究がなされていて付け加えることはないが、「のだった」を後続させなくてもよいような場合が多く、そのときは特に文を安定化させ、主張性を高め、話者の認識であることを表明することに貢献している用法と見るべきであろう。先の例で言うと、「伊達はその次の試合でも勝った」だけでも構わないが、文末が過去分詞による不安定感を抱えており、「のだった」を付加させていると考えられるが、「の」が続くことから「の」までの部分で話者による名詞化操作の介入があり、そのことも話者の認識表明というニュアンスを生じさせていると見ることができるのではないか。

#### <発見、思い出しの「た」> - (ムードの「た」) -

日本語の特異的な「た」の用法として発見や思い出しの「た」があり、これまで多くの研究がなされてきている。これらは過去形の一用法という見方で研究されているようであるが、これについて、ここでの見方を踏襲して考察してみよう。

(30) 「あ、あった！」

(発見) (捜していたものを見つけて)

(31) 「あ、そうだ！明日、会議があった。」 (思い出し)

この「あった」のところが、定形の過去ではなく過去分詞である(ないしそれに極めて近いもの)と考え、これが発話される状況や「あ(、そうだ)！」の部分が相まってこの文終止の過去分詞形に主張性が与えられていると見るわけである。

前側の例(30)では、「あった」という過去分詞が、発見、思い出しという強い認知行為が行われたことを表わしている。先に見た英語の場合(C)と同じであると考えられ、次の原理が働いていると見ることができる。

原理：現時点での話者の認知の表明には裸過去分詞を使用することができる

これは話者の主観性の強い主張で、そうでない場合の客観的主張性と区別できそうである。筆者は今回初めて主張性をこのように客観と主観の2つに分けてみることを思い付いたが、これが意味のある区別であると考えられるのは、後側の例(31)で、通常、「明日、会議がある」のように、未来の事態に対しては一般的に現在形を対応させるのが原則であるにもかかわらず、強い認知表明という主観的主張性を出すため、その原則が犠牲にされていると考えられるからである。現時点の直前の認知自体に焦点が当てられると、内容が未来とか、過去とかに関係しなくなるということではないか。逆に

(32) 「あ、そうだ、あのとき変な車が止まった！」

では、通常、内容が過去だから過去形が使われていると考えるのであろうが、この過去形も思い出しの「た」で過去分詞(の性格が強い)と考えるべきではなかろうか。これは思い出しの文であり、前の例文(31)の場合と同じ気持ちで発話されていることが内省的に確認できる。思い出しというのは、心の中での再発見であり、思い出しと発見は本質的に同じものと考えられるが、そうであれば、対象の事態の時に関係なく1つの表現形式でかまわず、その際の時制の働きも同じと見るべきだろう。結局、この発見、思い出しの文というのはそのような心的行為(が行われた時点)に焦点が当てられた文であり、そこに現れる「た」は過去分詞としての「た」であると結論付けられる。

〔これに関連して後に補足あり〕

発見の表現の1つとして「あ、いる！いる！」と現在形の場合もある。「あった！あった！」が前から捜していたものを見つけたときの表現と言えるのに対し、同じ前提があっても「いる！いる！」も発話できる場合がある。「(予想通り) いる！いる！」というぐらいの意味であるが、この表現は認知した時点そのものに焦点が当てられているのではなく、「あ！動いた！」のような認知後である現在の観察続行時に焦点が当てられ現在形になっていると説明できる。

## <～たら>

やはり「た」が現れる次の例を見てみよう。

(33) 「もし岡山へ来たら、電話してくれ」

「来たら」に対して「来ると」の形も可能であることから、「来た」は過去形ないし過去分詞形と考えられる。そして未来に関する条件部分に使われていることから、過去形ではなく、過去分詞形と考えるべきではないか。ここでのテーマである時点からの視点ということから考えると、1章で取り上げた日本語の「～の後」という接続詞の用法で、ある時点にローカルに視点の基点が置かれるのと同じように、今の場合「岡山へ来る」ということが既定の事態としてローカルに仮定され、そこを基点にして主節の事態が述べられていると考えることができる。この場合も「来た」が過去分詞形と考えれば、このように理にかなった表現方法であることが分かる。過去分詞と見れば、それが絶対過去を表わしていると考えする必要はないからである。2つの事態の一方を既定的に扱うことにより、そこにローカルに一時的な基点を置くことで2つの事態の間の時の関係がよりよく表現される。しかし英語では、時に関して視点を日本語のように変化させず、1章で見たように、条件、帰結の両節とも現在から見た絶対時で述べるのが普通である。それは言わばズームなしのカメラ移動のみを使用する客観的表現方法と言える。ただ英語でも、日本語と似た手法が使われることもある。次がその例である。この場合、完了形を使うことにより、いくらか日本語のようにローカルで一時的な視点を設ける表現方法になっている。

(34) I shall start if he has come.

(35) Given that she's inexperienced, we can't entirely blame her for the accident.

(34)では助動詞と過去分詞が結合して複合動詞(完了形)を形成して時の差を表しているが、(35)の例はかなり日本語に近い表現手法であると言える。さらに、日本語は、視点の置き方を変えることに加え、様々な語彙を絡ませて豊かな事態間の関係記述を可能にしている状況も見えてくる。

～したところである   ～したのである   ～したようだ   ～したことがある   ～したはずである  
これらの形は、分詞で終わる節が(準)名詞を修飾していて、その節が表す事態が既定的に扱われる点が一



貫しているのが分かる。共時的な見方を取り、「た」が過去形の一用法という見方も間違いではなかろうが、この場合も「た」は時の経過を示すための既定性（完了性）を作り出す過去分詞と見たほうがよいことが納得できよう。

次の日英語の例文を見てみよう。

(36) a. If I were a bird, I would fly to you.

b. もし私が鳥だったら、・・・

これは条件節のところに日英語共に広い意味での“過去形”が現れているが、その出現に同じ原理が働いていると筆者は考えていた。しかし、日本語の「鳥だったら」のところが過去分詞の性格が強いとすると、「だった」は“were”とは異なった文法要素ということになる。しかし、同じ機能を果たしていることから、次の大胆な仮説が浮かんでくる。

仮説：英語叙想法の過去形は、それが表す時に關し日本語の過去分詞形（「た」）と同じく話者が事態を既定的（完了的）に扱うことを表わす

筆者自身、これは意外な感がするけれども、叙想法が現実の過去の事態を表わすものではないこと、したがって時に關して絶対過去を対応させることができないこと、そして、話者の想像を述べるものであることを考えると、このことは認めざるを得ないだろう。例文(36)の主節の“would”も“were”と同じく叙想法過去と言われているが、話者による既定的な扱いを表していると考えられる。I のところを he に変えれば、彼についての事実と反する事柄として話者が想像しているからである。ただ、叙想法過去を用いる場合にはそれが反事実を意味している点が、日本語の「た」の条件節と完全には一致していない。この仮説を認めると、叙想法という話者の想像を述べる形に現在形と過去形の2つしかなく、したがってそれぞれ未定、既定に分かれていることから、叙想という枠の中で既定的に扱うことにより非現実のことを述べるのが英語で、現実・非現実を問わず出来事の時間的順序があれば、その部分をローカルにズームアップして示すのが日本語ということになる。日本語訳では条件「～だったら」の部分を既定として基点に置き、その後の主節につながるのに対し、英語では両方とも既定的に扱う、言い換えればもはや変えることのできないものとして（想像した事柄を）述べるという違いである。そうすると条件のところは日英語共に既定的に扱うのだが、その扱い方が（主節との関係では）異なると言える。“were”と「た」は異なっている文法要素であるが、その条件内で考える限り働きは同じである、という結論になる。まだ多くの英語法助動詞が叙想法過去形で話者の想像・婉曲といった意味を表わすようになっているが、それは叙想法の過去形が持つ既定的な捉え方のせいと考えられる。話者の現在の考えをストレートに表現するのではなく、客観的に既定のもの、完了したものとして扱うことにその本質があると考えられる。英語叙想法では、非現実であることが前提にあり、その点が日本語「た」と異なるところであるが、決定的には英語が直説法とは異なる叙想法の枠を持っている点が日本語と異なっている点である。

英語叙想法の過去形の意味は、日本語の発見・思い出しの「た」と同じく、発話時直前に事柄を認識して示すことになる。筆者は考えるに至った。主節に現れる英語助動詞の叙想法過去の用法も同じで、直説法現在形が話者の現在の考えを客観的に示すことにあるのに対し、叙想法過去では発話時直前に話者により意識・認識されたものとして既定的に提示するものである。would、couldなどは、直接、現在の認識を表わすということ避け、「ついさっき思われた」という形を取ることであり、婉曲用法になっていると考えられる。

まとめとしては、例に示すような were と「だった」の“過去形”は、動詞の形としては完全に異なった形である。しかし、英語の were が、叙想の枠の中で発見・思い出しの「た」と同じ機能を果たしているのに対し、日本語の「だった」のほうは、時間的ローカルズームによる主節と従属節の間の時の関係を示す用法であるが、ともに既定的な扱いを基本に置いている点が共通である。筆者にとっては、長年感じていた疑問に対し、極めてすっきりとした見通しが得られた感がしている。

### <促しの「～た」>

次の文も、英語の直説法過去形の用法のようなものと考え、極めて不思議に見えるものである。

(37) 「さあ、行った！行った！」

これもやはり過去分詞がルート位置に出現していると見るとどうであろうか。そうすると、要求したい事柄を聞き手に既定的に表わした文、すなわち当然なされているべきこととして述べた文であると考えられる。その意味で、既定性の要素がない次の文も対人的には同じように機能するけれども、次の文は単に要求を述

べているだけである。

(38) 「さあ、行く！行く！」

過去分詞が「さあ」という促しを表示する語の後に来ることにより主張性が与えられている。したがって、

(39) Be gone! (行け！)

での、be が日本語の「さあ」やフレーズの繰り返しの状況の力に相当し、過去分詞の gone のところが過去分詞の「行った」にそのまま対応していると考えられるのではないか。

筆者はこれまで、この「行った」が過去分詞であるという考えを持っておらず、英語の直説法過去に相当するものと考えていたが、それではどうしても、なぜ過去形なのかうまく説明できなかった。しかし、これが過去分詞であり、既定的（完了的）ということを示しているものであると考えればこのように納得できる説明となる。その意味では「～したらどう」という「～した」の部分だけが残った条件のようにも考えられるが、それでは要求の意味合いが弱く、またそのように複雑に考える必要もない。既定性（完了性）が「既に実行されている」ことを“当然”のこととして示しているが、「さあ、行く！行く！」がこれからのことだけに言及しているのに対比される。また、「さあ、行って！行って！」も「さあ、行く！行く！」と同じであり、これも既定性が全く入っていない表現で、対人的機能は同じと言えるけれども文の構成の仕方が「さあ、行った！行った！」とは異なっているということになる。

#### 〔補足〕

井上は発見の「タ」（ムードの「タ」の1つ）について次のように述べている。

発見の「タ」は、発話時直前において観察された状態 p を、発話時における同一の状態 p から切り離して独立に叙述することにより、発話時直前に観察行為があったことを暗示する表現である。(p.145: 井上) 井上は発話時直前の観察行為ばかりでなく、ずっと前の事柄にも同じ原理が働くと考える。これについて、井上は、「(見たら) …だった」という意味である、と説明している。

(100) (今日太郎からもらったCDを聞きながら、日記を書いている)

今日太郎からCDをもらった。ベートーヴェンの「第九」だった。今聞いているが、なかなかいい演奏だ。(p.143: 井上)

また、次のようにも述べている。

発見の「…タ」は「認識の確定」というニュアンスをとともうが、これも、「…タ」を用いた場合は、「当該の件については観察済み」ということになるからである（「…タ」自体が「認識の確定」という意味を表わすわけではない）。

(114) (探していた本がかばんの中にある（入っている）のを見つけて)

あ、ここにあった（入ってた）。(p.143: 井上)

発見の「た」の文が示す意味、特徴についての記述に異論はない。しかし、その文がどうしてそういう意味を持つのかを説明する部分については筆者は異議を唱えるものである。『「…タ」自体が「認識の確定」という意味を表わすわけではない』という点が、根本的な相違点であろう。筆者は、次の「た」を根源と考える。

「た」は元々過去分詞で、物事の既定性を示し、それが示す時に関しては相対的である

この「た」が発話状況（文脈）から主張性を得るのは発話者による現時点の認識表明の場合である。このように考えると、発見の「た」は認識そのものに焦点が当てられた表現であると考えられる。英語のムードの法助動詞も正にこの条件で出現すると考えられる。この過去分詞的な「た」が非常に強く残っているのが日本語で、その意味で日本語は話者中心の主観的側面の強い言語であると言える。「(みたら) …だった」という「た」の用法も、視点を過去時に置いた同じ認識表明である。過去に身を置き、そこを現時点にした表現となっている表現である。

#### 参考文献

- 1) ジーニアス英和大辞典 2001年 大修館書店
- 2) リーダーズ英和辞典第2版 1999年 研究社
- 3) 新英語学辞典 1982年 研究社
- 4) 井上 優 第3章「現代日本語のタ」：『「た」の言語学』 2001年 ひつじ書房



- 5) 野田 春美 『『の(だ)』の機能』1997年 くろしお出版
- 6) 河本 誠 “英語分詞構文の同時性・補足性” 2003年 岡山理科大学紀要 第38号 別冊
- 7) 釘貫 亨 “平安時代語における過去辞が介入する名詞修飾の特徴”

日本語学会 2009年度秋季大会予稿集

# Time Reference by Participles in English and Japanese Languages

Makoto KOMOTO

*Department of Socio-Information, Faculty of Informatics,  
Okayama University of Science*

*1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama 700-0005, Japan*

(Received September 30, 2011; accepted November 7, 2011)

The Japanese verb inflection *-ta* has been investigated from the synchronic perspective, but its unique usages have not been explained satisfactorily as far as I know. I have recently got a knowledge that *-ta* was an ending to be used adjectivally modifying the preceding noun (phrase) with the meaning of something being done or perfective (relative past). This implies that this *-ta* corresponds to the English past participle (to some extent). In this paper, I have set this property of *-ta* at the basis for explaining the usages of *-ta*, and I have found that the unique usages of *-ta* can be better explained by regarding *-ta* as exerting the property of past participle. I have come to the conclusion that *-ta* has expanded in usage to include the function of the English indicative past tense, but still keeps its original property of past participle (relative past).